

傍観者のテーマとホーソーンの生涯

-“Wakefield”を中心として

鈴木 進

1

ボウドン・カレッジ以来の友人フランクリン・ピアスの大統領選挙の功により、ホーソーンはリヴァプール領事の地位を与えられた。4年間の任期を勤め、フランス、イタリア等各地を旅行して、7年振りに帰国したホーソーンを待ちうけていたのは、南北戦争前夜という祖国の危機であった。奴隷制度をめぐる南北諸州は内戦へと一触即発の様相を呈していたし、家族の中にあってもすら血肉相争うことになる戦争の一年前の1860年6月のことであった。

文学作品は社会や時代を写す鏡であるといわれるが、南北戦争の同時代の作家達が奴隷制度について、いかなる考えを持ち、いかなる態度をとったか興味ある問題である。19世紀アメリカ文学界について、大まかにいってしまえば、ストウ夫人やホイットェ等の、いわば文学者としては二流の文人たちを除いては、ポウもホイットマンもメルヴィルも、筆をもって戦の先頭に立つ気持はなかったらしい。ホーソーンもその例外ではなかった。

奴隷制についてのホーソーンの考えは、前述の大統領選挙のために書かれた*Life of Franklin Pierce*の中に見られる。ホーソーンはピアスを大学以来の親友としてだけでなく、政治家としての彼に全幅の信頼と称賛を与えていた。このことからホーソーンがピアスと同じ政治的姿勢をもっていたものと推察できる。この政治家にとって奴隷制廃止の問題は、連邦制国家を維持するという大事の前に必ずしも重大問題ではなかった。ピアスのこの考え方についてホーソーンは、アメリカ最大の政治家が持つ資質として、あるがままの国を愛し、あるがままの事象から善を導き出すことが実用現実の政治の責任を持つ者として大切なことである。その資質を備えた者こそ民主党大統領候補フランクリン・ピアスその人である。奴隷制が悪であるのは認める。しかし神がその矯正を人間の手に許さないのである¹⁾、と述べている。この考えは最後には、もし戦争という大手術によりこの必要悪が取除けるならばやってみてもよいのではないか、というように変る。しかし積極的に、奴隷制廃止論者の先頭に立つことは決してなかった。

1861年、ついに内戦が始まった。57才の老文学者が戦闘に加わられる筈はなかった。また、戦場に送り出すには息子ジュリアンは若すぎた。そのことをホーソーンは感謝している。

では、ホーソーンは日和見主義者であったか、というとは決してそうではない。むしろ、不利な立場に立つことを承知の上で、信念を貫き通す所が見られる。例えば、*Our Old Home*の出版の時に、売れ行きを恐れた本屋の忠告には耳を貸さず、この時南軍の同情者として非難的であったピアスに献呈している。

全国民が内戦の興奮にわいている中に、もうひとつのホーソーンの実態の姿が見られた。急進的奴隷解放論者たちからその死を殉教とたたえられたジョン・ブラウンについてホーソーンが書いた唯一の南北戦争論“Chiefly About War Matters” *The Atlantic Monthly*, (1862年7月号)がそれである。ホーソーンは其中で解放者ホイットィアの“John Brown of Osawatmie”には共鳴をよせるが、軽薄な共鳴者(エマソンを暗示していると言われる)は、「ブラウンの死をイエスの十字架に比べられる神聖なもの」といっていることに呆れ果てている。ホーソーンによれば、愚かな犯罪行為に対してブラウンの受けた処刑は破れた者としての当然の報いである。良識ある者なら冷静にこの事実を見抜けぬ筈はない、と冷めた目で眺めているのである。激しくゆれる時代の中にあっても、時代の流れに巻き込まれることなく事態を見詰めている姿が、死を2年後に控えた時でさえはっきりと見られる。こうしたホーソーンの、時代も社会もそして人生をも横からじっと眺めている孤独な〈傍観者〉の姿勢は生涯変わらなかったのではないかと思われる。

2

作家は何かを訴えるべく作品を書くのであるから、一人の作家の思想や生き方が作中の人物の言動となって現われるのは当然のことといえよう。もちろん作品は作者の手を離れた独立した存在であるから、作者のねらいが思った通りに表現されていないこともあるし、読者の側も作者の意図とまったく違った受取り方をすることもありうる。例えば、ホーソーンの *The Scarlet Letter* の解釈をめぐる、frustration, 実態の探求、そして恋愛小説と考える批評家さえいるのである。それだから、作中の人物を作者自身であるかのように解釈する誤りは避けなくてはなるまい。それにもかかわらず、ホーソーンのいくつかの作品の中にはなお作者の姿を追ってみたい思いにかられるものがある。それらの作品は主として〈社会と孤独〉をめぐる主題を扱い、多くは彼の伝記的要素を裏付けとしていると思われるからである。

先に述べた時代や社会に対峙したホーソーンの傍観的姿勢が、作品の中ではどんな人物となって現われているかを探り、その目をもう一度ホーソーンの生涯に戻してみようというのがこの小論のねらいである。

ホーソーンは時代設定を自分と同時代におくことはほとんどなかった。ある時は17世紀中期ピューリタン社会を背景に、そして多くの場合、現実の社会よりも人間の心の奥底をアレゴリカルな手法で描く傾向にあった。しかし古い時代やファンズイの世界の人々の心の問題が、例えば近代人の疎外感に通じる現代性を持っている事実は、ホーソーンの作品の普遍性を物語るといえまいか。

視点を〈傍観者のテーマ〉に絞るならば、*The House of the Seven Gables* のホルグレイヴの生き方がまず上げられる。フィービがヘプズィバーとクリフォードに対するホルグレイヴの態度を傍観者のそれであると非難する場面である。七破風の一角に間借をしているホルグレイヴが老兄妹の不幸を知りながら、一体彼らの幸せを望んでいるのか、それとも不幸を願って

いるのか、とフィービが詰問するのに対してホルグレイヴは次のように答える。

「あの二人のことなら、援助も邪魔だてもしません。ただこの事態を傍観し、分析し、自分に明らかにして、あなたと私が今歩いている場所で200年もの長きにわたりのろのろと続いているドラマを理解しようというのです⁷⁾」

フィービはこのような言い方をするホルグレイヴを、古い屋敷という劇場で演じられる人生劇を他人ごととして眺める傍観者である、と厳しい非難の言葉を浴せるのである。

ところで、作品の中に作家の生き方を探ろうとする時、文学のジャンルでいえば、小説よりも、エッセイの方により真実に近い作者の姿を見るのではないだろうか。エッセイは作者の心に浮かぶ思いをより卒直に書き記すからである。

ホーソーンの *Twice-Told Tales* の中には、stories, tales とならんで、作者自身その序文の中で sketches と名付けているグループがある。これらは小説ではなく随筆に近いものである。

*Twice-Told Tales*³⁹ 編の中で、例えば“Sight from a Steeple”, “Sunday at Home”, “A Rill from the Town Pump”, “The Toll-Gatherer’s Day”, “Night Sketches Beneath an Umbrella”, などに傍観的姿勢が多くみられる sketches である。

では、これらの sketch の傍観者は、どこで、何を眺めているのか。どの作品でも主人公と呼べる登場人物は登場しないで、ナレーターが人間の苦しみや喜び、それらが織り成す人間模様を傍観する形をとっている。ナレーターはどこにいるか。五つの作品で“Sight from a Steeple”はそのタイトルでも明らかなように、天と地の中間に位する高い塔の上からの眺めである。二番目ではカーテンの陰から、次の二つは道端に、そして最後の作品では暗い夜の町の散歩の途中である。これらに共通していることは、いずれもナレーターが人の目に止まらない所、つまりナレーターは相手の様子をよく観察できても相手には気付かれない場所から眺めている点である。言い換えれば、現実から一步離れた位置ともいえる。観察者が現実生活を構成する一員となってしまうと、現実生活を見渡せないからである。

“Sight from a Steeple”のナレーターは、ある日、天に聳える尖塔に登った。彼はそこから遠い地平線に群がる金色の雲や村や小川や丘を眺めた。しかし彼の関心はそれらの自然よりも人間の営み方にあった。波止場は人々で賑わっていた。路上に葬式の行列があった。軍隊の行進と、それを真似る子供たちの群、商人や娘の姿、その誰一人として、尖塔の上で自分たちの振舞を見ているナレーターの存在に気付く者はいない。ナレーターはさらに自分が“spiritual Paul Pry”となって家々の屋根を剥がしそこに住む人々の心の秘密を知れたら良いと願うのである。

次は、生涯、教会に行く習慣のなかったホーソーンと覚しきナレーターが近くの教会の礼拝に集まる子供たちや年寄りや牧師の姿を寝室のカーテンの陰から眺め、讃美歌や説教の断片に耳を傾てる。しかし自分が会衆の一員に加わろうという気持は少しもない、というのが“Sunday at Home”である。

眺める主体が人間でなく物体であるなら、人間は自分が観察されているとは思わないから、

あるがままの姿を見せるだろう。町のポンプが水を飲みに来る人々を観察する想定が“A Rill from the Town Pump”である。ポンプから水を飲むのは社会を構成しているあらゆる階級の人々だから、ポンプはあらゆる種類の人々を居ながらにして観察できた。このポンプもいつの日にか取り壊され、その場所に記念碑が建てられ、教訓を込めた次のような文字 (it is good to cool fevers and cleanse stains) が刻まれるだろうというのである。

人間絵巻を見物する絶好の場所こそ、橋番小屋であるという。向うの町とこちらの町の間中に位置し、橋の下の入江に満干し、頭上に北風が吹いている。ここはいわばこの世の中間地帯だからである。“The Toll-Gatherer’s Day”の書き出しは「騒々しい人生の波間に飛び込んでいくよりは、むしろ人生の流れを見つめるようにとの本能の声を聞く人には、何といったってこの世の人がひしめき合う往来のそばにある橋番小屋にまさるかくれ屋は他にないと思れる³⁾」という文章に始まる。病気の女が悲しそうな表情の男に寄りかかりながら通る。羞らいにほほを染める花嫁を乗せた馬車が通った。女も子供も老人も。橋番の見たこれらの人間の全行列が、「ほんのしばしの幽霊の見せ物」 a flittering show of phantoms⁴⁾ に思えるのである。

“Night Sketches Beneath an Umbrella”のナレーターは拡大鏡を通して世の中を観察しているとしか思えない。普通の人間は誰も目を止めないで行きすぎてしまうような小さな出来事を作者が鋭敏な感覚で捕え文学に仕立ててしまう。ナレーターは暗い冬の夜、傘の下から世の中を見ているのであった。

以上あげた作品のナレーターたちは皆、現実の世界から一步離れた場所に立っている人たちである。彼らは世の流れの外にあるだけに世間を全体として見渡せる利点があるが、内部については知り得ない。“Sight from a Steeple”のナレーターは if I would know the interior of brick walls, or the mystery of human bosoms, I can but guess.⁴⁾ といっている。

ナレーターの立場というものは、小説家の社会における立場に相当する、といえまいか。ヘンリー・ジェームズの言葉を借りるなら、小説家という職業は現実と fiction の中間に位置しそこからロマンスが生み出されるのだという。しかし、この位置は同時にホーソーンのような性格の小説家を世の中から孤立させることもありうる。隣人を冷静に観察しようとする余り、人間同胞の絆を切ってしまう危険性をもはらんでいるからである。

Twice-Told Tales のスケッチまたは随筆のグループに属する五つの作品を先に取り上げたが、その他の作品の中には short story と essay とともに、読み方によってどちらにでもとれるものもある。物語の核になるアイデア (教訓が多い) が勝ちすぎた作品がそれである。そのようなものの一つに “Wakefield” がある。そしてこの “Wakefield” の物語もまた、前述の五つの sketch と同じく傍観者のテーマを色濃くもつ作品であると思われる。

ホーソーン作品はどれも高い芸術性をもっているにもかかわらず、その中に盛られた道徳と教訓ゆえに価値を評価しない批評家も多い。その代表者はエドガー・アラン・ポウである。

この批評家の主張するところによれば、教訓を織り込む寓話とホーソンの全体の調子とは敵同志の関係にある、というのである。*Twice-Told Tales* 中の“Wakefield”という小品もその例に漏れず、読者はポウのこの言葉に首肯くことになる。なぜなら、古い新聞に載っていたという10行足らずの小さい記事に加えられたホーソンの想像力の豊かさ、物語の展開の見事さに引き込まれている時に読者は突如として結論の教訓に行き当たり、それをもって物語が終わるからである。この物語の spirit and moral は最後の一行で、Amid the seeming confusion of our mysterious world, individuals are so nicely adjusted to a systems, and systems to one another, and to a whole, that, by stepping aside for a moment, a man exposes himself to fearful risk of losing his place forever. Like Wakefield, he may become, as it were, the Outcast of the Universe.「うわべだけ見ると混乱しているように思われるこの世界は1人1人がきわめて精密に体系に組み込まれておりその体系が相互に調整されて全体となっているのだから一瞬たりとも脇にそれるとその人は永久に自分の立場を失う恐ろしい危険に身を呈することになる。ウェイクフィールドのようにその人はいわば宇宙の追放者になってしまう。⁹⁾」

ホーソンが物語の素材となりそうな記事を『ノートブック』に書き記していることはよく知られている。上に引用した“Wakefield”の結論に相当するアイデアは *American Notebooks* の1835年10月25日の次の一文である。

Every individual has a place to fill in the world, and is important, in some respect, whether he chooses to be so or not.

1835という年は、ホーソンが自ら owl's nest と称して社会の歯車から脱落していた時期でもあった。恐らく上記の思いが暖められ“Wakefield”の作品が生まれたのであろう。

“Wakefield”の物語は次のようである。ロンドンに何の変てつもない一組の夫婦が住んでいた。夫はある日暮のこと、ちょっと田舎まで旅行をしてくるといって出掛けたが、実は自分の家の隣のストリートに部屋を借りて住みついたのであった。彼にはこの世から姿を隠す露ほどの理由もなかった。20年以上もそこに下宿住いをし、妻や友人は彼の消息を聞くこともなかった。その間彼の方は毎日わが家を眺めていたし、妻の姿を見かけることがしばしばあった。結婚生活の幸せに大きな空白と断絶が出来て、もうまちがいなく夫は死んだものと思われ、財産も処分され、人々の記憶から忘れられ、妻も長い寡婦暮しの末に人生の盛りを過ぎたある日のこと、夫が静かに表の戸を開けて入って来た。まるで一日だけ家を留守にしたかのように、というのであよ。

この物語で Wakefield という男の奇妙な性格もさることながら、最後まで理解できないのは彼の家出の動機である。妻に不満があったとは思われない。それどころか、「可能な限りの愛情をもって妻に忠実であった。」と書いてある。ただ、妻には姿を見られない場所から彼は絶えず妻の動向を観察し続けたにすぎない。

アメリカ文学の中で、妻から離れて、思うような生き方を求める男を上げるなら、その筆頭

はリップ・ヴァン・ウィンクルであろうか。彼の家出の動機がガミガミ屋の妻にあることは明白である。ホーソーン作品には、妻から逃げ出すもう一人の男がいる。新婚の妻の懇請をふり切って森に入って行くグッドマン・ブラウンがそれである。ブラウンの場合も、夜の森に出掛けて行かなくてはならない理由を作者は一言も書いてない。婚約者エリザベスを避けるフーパー牧師も、多少型は異なるがやはり妻から逃げるタイプの一人になるろう。

ホーソーン作品のこれらの夫を Frederic C. Crews は、flight from the marriage bed であり、フーパーは sexual embarrassment のためである、と説明している。彼は Hawthorne's fastidious idealist always free from the modest sexual demands of actuality⁶⁾ と結論する。こうした Crews の考え方は Freud の説に基づくものであるのは明白だ。しかし筆者は人間の行動をこのように一つのパタンですべて割切ろうとすることに疑問を持つものであり、Wakefield の 20 年の家出の動機としては Crews の説だけでは無理ではないだろうか。

Wakefield の家出を考える時は、彼の妻だけがかすかに気付いていたという「彼の不活発な心の中に錆びついていた隠やかな利己心、最も不安定な特徴である一種独特の虚栄心、隠すに値いしないようなささいな秘密を守ることで以上の効果しか生じないたくらみをしたがる気質⁷⁾」という一文に手掛りがあるのではないだろうか。Wakefield は、上に述べたことがらを動機として、身を隠すという手段によって、自分と自分をとりまく小さな社会のありのままの姿を人知れず眺めたという病的な好奇心から家出をした、と解釈するのが自然ではないかと思われる。このような人物はホーソーン他の作品にも登場する。“Roger Malvin's Burial” でルーベンが、見捨てたマルヴィンの様子を覗き見たいという狂気じみた好奇心に駆られ引返すのと共通する心境であろう。

ホーソーンが密かに羨む立場の人物に前述の “Sight from a Steeple” の Paul Pry がいる。ナレーターは次のようにいう。

The most desirable mode of existence might be that of a spiritualized Paul Pry, hovering invisible round man and woman, witnessing their deeds, searching into their hearts, borrowing brightness from their felicity, and shade from their sorrow, and retaining no emotion peculiar to himself. But none of these things are possible ; and if I would know the interior of brick walls, or the mystery of human bosoms, I can but guess⁸⁾.

Wakefield もまた自分の家出した後の家族の心の動きを知りたいという、ただそれだけの思いつきを果たすために 20 年を費やしたのだ。妻の目を欺くためには鬢まで着けて変装する。夕暮になると日毎の散歩と称し、わが家の近くに姿をあらわし妻の変化を探ろうとする。ある時妻が病気になり危篤の知らせが玄関を出て行くのを見掛ける。夫の心は騒ぐが、彼の口から出た言葉は、「こんな時に突然帰って妻の心を乱してはいけない」であった。そのようにして 10 年間もわが家の回りをうろつくが一度も敷居を越えることはなかった。Wakefield のタイプの

人物は事態のすぐそばに居ながら中に入って係わり合いになるのを避けて、常に眺めているだけなのである。一方自分がこの大きな世界の中で、とるに足らぬ存在であることに気付かず、社会は自分に注目していると思いついでいる。今では人々の心の中から葬り去られてしまったので、人々は彼のそばを通りすぎても誰れも彼を認めない。Wakefield が妻や家族の目に脅え息を弾ませて下宿に逃げ帰る姿は self-centered な人間の滑稽な、しかし哀れなアイロニーである

自分の家に戻る機会は、死者がこの世に戻るのと同じくらいしかないという Wakefield にも帰る機会が全くなかった訳ではない。最初の一晩を後悔と妻への思慕のうちに下宿で過ごした翌朝早く、自分の家の戸口への階段に軋む自分の足音にはっとしてあと振り返りもせずとんで帰るのだった。この引き返した一歩がこの先どんな運命に繋がるかは夢にも知らずに。妻が重病に罹った時も帰る時期であった、が彼女が危機を過ぎて快方に向った時夫は帰る機会を失なった。ロンドンの雑踏の中で群集に押されて夫が妻に再会する場面もある。この時、分れたのも群集に引き離されたというより、Wakefield が妻から逃げ出して、下宿の戸に門を掛けるのである。20年後、もはやわが家とは呼べなくなっている家の敷居をまたいだのは自分の意志によるのではなく、散歩の途中秋雨に濡れたからであった。こうして戻った男は妻にとっては Wakefield の影だったのかも知れない。なぜなら夫婦の愛情に chasm が生じた時に妻の心の中では夫は死んでしまったし、例え死ななかつたとしても妻の心の扉は完全に閉じてしまったのだから。しかし彼にとっては 20 年の家出はあくまでも妻を犠牲にした little joke にすぎなかつたのだ。これが Wakefield の犯した罪なのだ。Wakefield は後に述べるイーザン・ブランドと同様に他人の心を覗くことにより “the magnetic chain of humanity” を断ち切る罪を犯したことになる。これこそホーソン独特の罪 the Unpardonable Sin なのだ。

許されざる罪を扱った “Ethan Brand” のイーザンは大理石を焼いて石灰を作る素朴な愛すべき石灰焼であった。ある時 unpardonable sin とはどんなものであるか知りたいと思うようになった。この思に取り付かれてからの彼は人々の心の奥深くを覗き込む孤独な観察者になってしまう。知的欲望を達するためには人間同胞をも実験の対象としか思えなくなってしまう。そしてついに探り得た unpardonable sin とは人間同志の兄弟愛と神への敬虔の念を踏みにじる知的奢であり、そのためあらゆるものを犠牲にしてでもこの要求を満たそうとする罪なのであった。人々の心の中に求め続けた罪が実はこのように求めている自分の中にこそあるのだと気付いた時イーザンは燃えさかる石灰のかまどに身を投じてしまうのである。

Wakefield もイーザンと同じように自らの手で人間同胞との絆を断ち切った結果、時間的にも空間的にも孤立したエゴイストになってしまう。彼には年月の経過が人間にもたらす変化を理解できなかつた。20年の年月を彼は一週間と思いついでいた。妻の心から自分の姿が消えてしまったとも知らず彼はあらん限りの愛情を尽くし妻に忠実であった。二人の関係における距離は、馬車が一晩中走り続けたのに匹敵するほど離れているのに Wakefield は「ほんの隣の通りにすぎないじゃないか」と言う。自己中心の男は自己だけにしか通用しない物指しで空間

と時間を計ろうとする。社会の中に生きていながら、生きている人間としての立場を放棄してしまった。しかし死者の仲間に加わることも許されない、いわば *always beside his wife and at his hearth, yet must never feel the warmth of the one nor the affection of the other.*⁹⁾ というのが Wakefield のこの世における位置なのだ。

もとより Wakefield とでもこの世から葬られようと取り計らった訳ではないのだ。むしろわれわれが統御することのできない力に操つられて、それはちょうどイーザンがエスターを実験材料として人形のように扱ったと同じように Wakefield もまた操つられたのである。ホーソーン作品には “David Swan” のディヴィドや “The Ambitious Guest” の若者のように、運命論的な story があるが Wakefield もまた見えざる糸に踊らされている人物と言えないことはない。人間の目にはどうも計り知ることが出来ないが、きちんとした法則と秩序のもとに一人一人の演ずべき役割が決まっている。比喩的な言い方が許されるなら、われわれは皆人生劇場の舞台の上で Prime move の書いた台本通りに手足を動かしている役者にすぎないのだ。 *As You Like It* の Jacques のせりふを借りるなら *all the world's a stage. And all the men and women merely players ;* なのだ。Wakefield に話を戻せば、主人公はこの人生劇を観客として外から見物するつもりで舞台を下りた、というより足を踏み外し、落ちてしまった。人生劇場には客席などもともと存在しないし、人間はすべてが操つり人形なのだ。仮に舞台以外の場所があったとしても、そこは宇宙の暗黒の世界であって、Wakefield は宇宙の永遠の放浪者になってしまう。なぜなら Prime move の手を離れ、人間同胞を結ぶ *the chain of humanity* を切って社会の傍観者の立場を取ったから、というのがホーソーンの本意ではあるまいか。

4

Wakefield は、もし自分が失踪したらそれに対し妻はどんな反応を示すだろうか、それを密かに眺めたいという気紛れを実行したために宇宙の放浪者になりかけた。実人生を逃避して、妻を中心とする世間を歪んだ角度から色眼鏡を通して眺めようとした傍観者の結末であった。

社会からの追放を自らの手で行なったとは言いながら、Wakefield の 20 年の孤独の苦しみを知る時に、作者ホーソーン伝記を知るわれわれはホーソーン 12 年間の “an owl's nest” を連想しないわけにいかない。1825 年、ボウドン大学を卒業したホーソーンはセーレムの母のもとに帰り職にも就かず世の中から姿を見せなくなってしまった (*disappeared like a stone dropped into a well*)。その原因と理由についてはホーソーン自身説明がつかないまま、人生の主流から引き離され再び戻れなくなってしまった、と告白している。ふくろうが夜になって出歩くように彼も夜のセーレムの町を散歩しながら微細な事柄を観察し続けた。日中は書齋に籠り読書と執筆の孤独な生活をした。暗い部屋と社会を結ぶ唯一の日の光もブラインドの隙間から漏れ来るのをじっと座って眺めるだけであった。世間と直接接触しないで心ならずもふくろうの生活を余儀なくされている物書きが人生への好奇と詮索を強めて、肉眼が捕えた極く小さな出来事を素材として、それにあり余る想像力を加え story を書き続けたのであ

た。そのようなホーソーンにとって spiritual Paul Pryこそ羨ましい存在であり、Paul Pryの病的な人物として Wakefield が生まれるのも不思議なことではない。芸術が芸術家を孤独にする例はなくはないであろう。ホーソーンの文学修業はこのような孤独な観察の中で行なわれたのだ。

ホーソーンの孤独癖は生来の性格にもよろうが、それだからといって現実を避けて生きている傍観的な自己の立場を彼が肯定していた訳ではない。例えばイーザンも Wakefield も、社会から孤立した罪を犯したとして否定されているのはそのことを示すのであろう。時として自分を現実の生活のまっただ中に投げ出さなくてはいけない、と強い衝動に駆られることがあった。社会と喜びだけでなく悲しみをも共にしたい。単なる spectator としての半人的生き方が恐ろしい運命に思えてきたのだ。そのように強く願いつつも、なし得ない苦しみがあった。そしてひとつには、Wakefield の言葉を借りるならば、この一見混乱して見える社会にあって個人は非常に精巧にひとつの組織に調整されているので、社会の外に出た者には、もう一度社会に戻る隙間すら見い出せないのだという。

他方、社会の流れの中に飛込んで行こうとする自分を引き留める作用もあった。“My Kinsman, Major Molineux”の中で、混乱した群集の騒ぎに飛込んで行こうとするロビンを作者と覚しき壮年の紳士が裾をつかんで引き留める。それはホルグレイヴが「ただこの世の中はまったく妙に理解しがたい世界ですからね。眺めれば眺めるほど混乱してくるんです¹⁰⁾」というのに通じる。ホルグレイヴの「眺めれば眺めるほど」という言葉に注意する必要がある。実は眺めるという態度をすてない限り社会へ戻ることは不可能なのだということをホルグレイヴもホーソーン自身も気付いていないのだ。

このような苦しみをホーソーンはボウドン時代の友人ロングフェロウへの手紙に書いている。

「人生の主流から引き離された私には二度ともとに戻れないと思うのです。あなたに最後会ったあれ以来、世間と没交渉になってしまいました。でもそんなふうにしよというつもりもどんな人生を送ろうかと夢みたわけでもありませんでした。自らを囚人として牢にとじ込めてしまい、今や外に出る鍵が見つからないのです。仮に戸が開いていたとしても怖くて外に出られないのです。あなたは苦労や変化に会われたそうですがそれがどんなものなのか私にはわかりません。しかし苦労は喜びについてよいものであり、この世で喜びも悲しみも共にしないことほど恐ろしい定めはあり得ないと、確信をもっていえます。」

孤独の部屋の扉を開けて世間との交わりを再開したいとの願いは、同じくボウドンの友人ホレッシュ・ブリッチによって実現された。ホーソーンは出版の陰に親友の援助があったとは知らず、出版業者グッドリッチに献呈している *Twice-Told Tales* の出版(1837年)がそれであった。これは不十分であってもホーソーンが世間との交わりを開こうとした試みであったのだ。*Twice-Told Tales* の出版は一年足らずのうちに1000部売り尽したという、ただそれだけの意味での成功だったならば、自己の深き内容に忠実であろうとし続けたホーソーンが真に満足

する交わりを得たとは言えないのである。しかしこの本の出版はやがて、心の空虚を満たしてくれた唯一の伴侶ソファィアとの出合いにつながるのであった。

性格からとはいえ、孤独の生活を余儀なくされていたホーソーンにとって home や hearth という言葉には特別の思いが込められた概念であった。“Wakefield”においても、主人公は物理的にはいつも妻と暖炉のそばに居ながら妻の愛情も火の暖かさも感じることを禁じられていたのだ。Wakefield は home の脱落者であった。気紛れと好奇心から家庭と妻のもとを去り、妻の危篤を眺めながら家庭に戻らなかった彼は a fearful risk of losing his place forever. … the Outcast of the Universe. になるところだった。もし彼がそのようになっていたら Wakefield は永久に次のように叫び続けるであろう。

“I want place! my own place! my true place in the world! my proper sphere! … my thing to do, which nature intended me to perform when she fashioned me thus awry, and which I have vainly sought, all my life time!” (“The Intelligence Office”)¹²⁾

このように社会から孤立して人間に対する共感を失ってしまった傍観者には、もはや救いの道は残されていないのであろうか。傍観者ホルグレイヴはフィービの愛により傍観者の生涯を歩むことから救われた。ホーソーンも又ソファィアとの愛により一応の救いを得たと言ってよいだろう。一応と言ったのは、ソファィアとの幸福の絶頂の中であって、ふと脳裏をよぎる不安が彼には見られるからなのだ。それは「自分のような生来の傍観者が妥当な形で人生に参加することは出来ないのではないか」という恐れであった。筆者はここで突飛であるが、わが国の一人の詩人を連想する。それは愛妻とみ子との結婚生活の中で書かれた八木重吉の次の詩である。

夕ぐれだから縁がわに出て／隣りの高い屋根を楽しむのだ／何となく悲しくなるのだ／みるがいい-哀しくないものがあるかえ!？／(中略)私は曇った空を見る／そうして私はだんだんと自分自らを白い寒いものを感じてくる。¹³⁾

この詩に通ずるさびしさがホーソーンにはあるのではないか。安藤正瑛氏はいみじくも「ホーソーンは事実異性との愛によって幸福になった。然し異性との愛は成程自他合一の生命の充実した歓びを味わせてくれるけれども、其れは決して至純至高の愛ではない。所詮、人間の愛は何処までも人間の愛である。人間存在の孤独性に由来する、根本的な淋しさというものは、恋愛とか結婚等によって完全に解消されるが如きものではない。真に人間の淋しさが解消されるのは、人間愛が更に純化されて、自己中心的、欲求的、傾向が絶対に否定された宗教的愛に深まらなければならない。相対愛より絶対愛に入らなければならない¹⁴⁾」と述べておられる。

ホーソーンのは孤独ではなくて社会からの孤立であった。といえるかも知れない。

ホーソーン最後の大作になる *Our Old Home* は領事としてのイギリス滞在中の印象記であり卒直な感想である。イギリスの最もすばらしい特質を十分に述べた作品であるが、これにもホーソーン自身の弱点が認められるという。それは彼をとりまく社会へのたえざる不信と懷疑があらわれているからである。この事実をホーソーン自ら承知して Journal には箴言

14章10節を引用して、自分が外来者であり異邦人であるので「その喜びにあずからない」と記している。

Our Old Home を評してヘンリー・ジェームズは「アウトサイダーの作品、局外者の作品である。最後までただの傍観者（観察者といったものではない）であるに留まった¹⁵⁾」と述べている。

生涯の最後まで傍観者であったホーソーンもまた *Outcast of the Universe* であったのだろう。

(註)

- 1) 第一章を書くにあたり *RACE AND THE AMERICAN ROMANTICS*, Edited by Vincent Freimarck & Bernard Rosenthal, 日本語訳『奴隷制とアメリカ浪漫派』谷口陸男監訳(研究社)のⅢ、憲法上の問題、ナサニエル・ホーソーン、(国重純二訳)を参考にさせていただいた。
- 2) Nathaniel Hawthorne, *THE HOUSE OF THE SEVEN GABLES (The Complete Novels and Selected Tales of NATHANIEL HAWTHORNE)*, (Modern Library, New York, 1965) p.373, テキストの引用は原則として Modern Library 版によったが、この選集に入っていないものについては次のCentenary Edition を用いた。
- 3) Nathaniel Hawthorne, "The Toll-Gatherer's Day", *TWICE-TOLD TALES* (Ohio State Univ. Press, Centenary Edition) p.205
- 4) *ibid.*, "Sight from a Steeple", p.192
- 5) Modern Library, "Wakefield", p.926
- 6) Frederick C. Crews, *The Sins of the Fathers*, (Oxford University Press, New York, 1966) p.113
- 7) Modern Library, "Wakefield", pp.921-922
- 8) Centenary Edition, "Sight from a Steeple", p.191
- 9) Modern Library, "Wakefield", p.925
- 10) *ibid.*, p.350
- 11) Malcolm Cowley (ed.), *The Portable Hawthorne*, (The Viking Press, New York) p.608
- 12) Centenary Edition Vol. X, "The Intelligence Office", p.323
- 13) 定本『八木重吉詩集』彌生書房
- 14) 安藤正瑛『エマソンとその辺縁』p.151 (関書院)
- 15) Henry James, *Hawthorne*, (Macmillan, New York, 1967) p.141

参考書

- Bewley, Marius, *The Eccentric Design* (New York : Columbia University Press, 1959)
- Carlson, Patricia, *HAWTHORNE'S FUNCTIONAL SETTINGS* (Editions Rodopi N. V., Amsterdam, 1977)
- Donohue, Agnes (ed.), *Casebook on THE HAWTHORNE QUESTION* (Thomas Y. Crowell Company, 1963)
- Martin, Terence, *HAWTHORNE* (College & University Press, New Haven, 1965)
- Mattiessen, F. O., *American Renaissance* (New York ; Oxford University Press, 1968)
- Stewart, Randall, *Nathaniel Hawthorne* (New Haven, Yale University Press, 1948).

傍観者のテーマとホーソーンの生涯

福田陸太郎編『アメリカ文学思潮史』（中教出版）

高村勝治、岩元 巖編『アメリカ小説の展開』（松柏社）の中で特に酒本雅之「傍観者の翻意」の論文から多く学んだ。